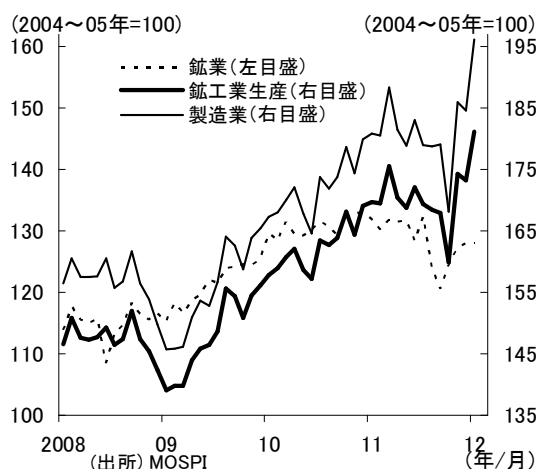


急回復するインド経済

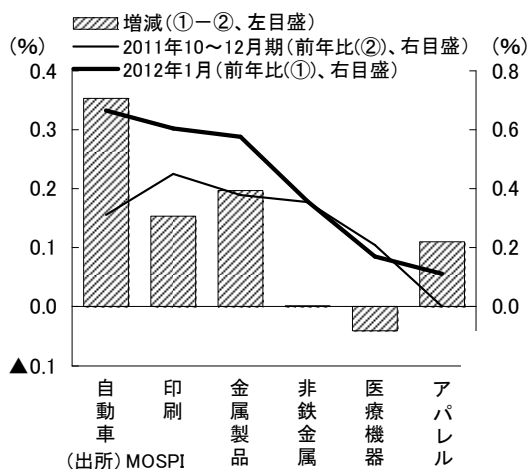
～ 力強い内需の盛り上がり ～

- (1) インド経済では前年比の実質経済成長率が2010年10～12月期の8.3%をピークに期を追って鈍化。昨年10～12月期には6.1%に落ち込むなか、先行きを不安視する見方が拡がり。しかし同国経済は、鉱工業生産が昨年10月を底に急回復するなど、昨年末から一転して成長加速へ（図表1）。鉱工業生産の前年比増減率は昨年10月▲5.0%から本年1月6.8%。とりわけ製造業の回復は大きく、昨年10月の▲6.0%から本年1月は8.5%に。業種別には自動車が原動力（図表2）。自動車に牽引され、金属製品も盛り上がり。
- (2) 生産回復は少なくとも当面持続する公算大。まず直近の2月では自動車が一段と増産（図表3）。品目別には三輪車が減勢に転じるなか、二輪車や商用車が堅調な増勢を持続。さらに、昨春以降、大幅な生産落ち込みの主因となった乗用車が力強い増勢を回復。内外需別にみると輸出は09～10年の増加から一転して昨年、一進一退。それに対して国内販売は、昨春以降の失速から昨年11月以降、急回復。旺盛な需要動向を受けメーカーサイドでも慎重姿勢が後退、積極的な増産体制に。
- (3) 経済全体の状況を示唆する物流動向や電力需要も昨年末以降、力強い増勢（図表4）。いずれも本年2月、既往最高を更新。貨幣供給量もハイペースの増勢持続。個人セクターでの住宅や自動車需要の盛り上がり、企業セクターで全土に広がる設備投資ブームを映じて、とりわけ民間向けの貸出が増加。
- (4) 根底には所得雇用環境の改善に伴う消費・住宅需要の増大と、同国市場拡大を見越した内外資本の積極的な設備投資をメイン・エンジンとする高度成長メカニズムの本格始動。直接投資を中心に外資流入は引き続き高水準。本年の同国経済は高成長シフトの公算大。

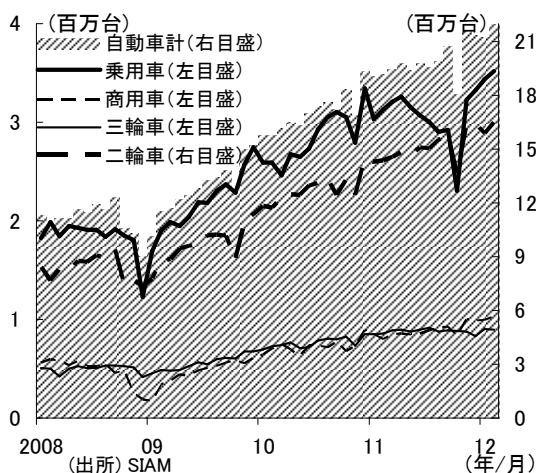
（図表1）インドの鉱工業生産（季調済）



（図表2）主要業種別生産動向（前年比）



（図表3）自動車生産台数（季調済）



（図表4）貨物取扱高と電力需要量（季調済）

